

資本主義の本質を問い直す

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト 土田 浩

いま話題のビジネス書から、「武器としての『資本論』」（著者：白井聡）を紹介したい。「資本論」と言えば、19世紀、産業革命後の資本主義の本質を探究し、共産主義革命を唱えた社会思想家カール・マルクスの大作である。

私が経済学部生だった1980年頃、必修科目の半分は「マルクス経済学」で、残り半分が「近代経済学」と呼ばれていた。数学を駆使する「近代経済学」は、ホモ・エコノミクス（経済合理性のみを追求する人間像）を大前提として、すっきり明快に論理が展開する。これに対し、「マルクス経済学」は、難解な概念の造語が次々と登場し、それらを駆使して理論が組み立てられるので、当時の私には荷が重かった。

その後、世界は、1980年代の米国レーガン大統領、英国サッチャー首相に代表される新自由主義（規制緩和と競争促進による経済成長路線）の台頭と、1991年の共産主義国家・ソ連邦の崩壊という結末を迎え、「マルクス経済学」も凋落した。

今日、市場型取引の際限なき拡大に象徴されるように、資本主義がますます勢いを増して世の中を席卷している。しかしながら、人々の幸福感が高まっているとは言い難い。そうした中で、著者の白井氏は、「現代社会の矛盾の原因は、間違いなく資本主義にある」と訴え、「資本論」を用いてそれを解き明かすのが、本書の狙いである。

「資本論」では、まず、「資本の目的は、ただ増殖すること」だとする。資本は、人々が豊かになるか否かに関係なく、ひたすら金銭に換算できる価値の増大だけを判断基準に動く。「資本」を「株主」と置き換えると、直感的に分かり易いかもしれない。技術革新も、資本の支配下では、人を幸せにするためと言うよりも、資本増殖の手段として位置付けられる。

また、「技術革新による資本の増大策は、すぐに模倣されて消滅する」ので、「資本主義の持続的発展には、安価な労働力の捻出しが方法がない」と説く。このため、

資本の側から、働く量、時間帯、持ち場などが詳細に規定され、機械化により作業が単純化される。その結果、自由・平等・人権を建前とする近代社会にも拘らず、実態は奴隷制にも似た働き方となり、働く者の人間性が疎外される。人々の価値観も、資本の増殖に役立つ者ほど有能だとする「資本の論理」に染まっていく。「人間とは資本に奉仕する道具である」との倒錯した議論がまかり通る社会になってしまうのである。

そして、「資本主義の行き着く先は、巨大資本による独占であり、搾取が増大する悲惨な世の中になる」とする。G A F Aが国家を超越して世界の富を欲しいままにする近未来を予言しているかのようだ。

著者の白井氏は、現代を、「必死で競争するが差を生み出せずに疲れ果てる時代」、「イノベーション競争への労働者の動員の時代」とみる。また、資本主義が想定するのは、自由な契約に基づく等価交換であるが、現実には、強い立場の経営者・発注者が従業員・下請け会社に対し、一方的かつ半ば暴力的に無理難題を押し付けており、これを「官僚制と資本主義の最悪の結合」と評している。

近代経済学の祖とされるアダム・スミスやリカードは、資本主義を人類発達史上の終着点と位置付けるが、本当にそうだろうか？ これに取って代わるシステムを見出せない現状ではあるが、だからと言って、社会を分断する資本主義の本質的メカニズムを放置したままで、高度文明社会の秩序は持続可能なのだろうか？

資本の論理に絡め取られたまま人生を終わらせたくない。ときにはこれを超越した価値観・世界観に思いを馳せてみたい。日本の将来を考える際も、少子高齢化のような数字で客観視できる問題に限らず、疲れ果てた離脱者の増加といった社会の深層に潜む問題にも目を向けてみたい。今般のコロナ禍により、世界中で格差の拡大が深刻化しているだけに、その思いは尚更である。